世代を紡ぐ道しるべ ③

～元海上保安官のひとりごと

中島敏

現実主義者たれ！

海上保安大学校での教育を終え、初任は伏木海上保安部巡視船「くろべ」参席航海士（現在の主任航海士）でした。ある日、外国船が遭難したため、救助に向かいました。救助後、上官からの「おまえは大学出だから英語ぐらい話せるだろう。海難調査を実施せよ」との命で、同船に赴きました。でも、大学校を卒業したからといって急に話せませんよね。その時も言葉が通じず期待に応えられなかった自分を情けない、英語を何とかしたい、海外で勤務できないかと考えました。単純な発想です。

当時の海上保安庁で海外勤務ができるのは、一握りの優秀な者だけ。超低空の成績で卒業した身としては、かなわぬ夢でした。そんな時、目に飛び込んだのが青年海外協力隊募集のポスター。役所に内緒で受験し、合格後、協力隊に参加したいと人事課に相談したところ「勝手に受験したのだから海上保安庁を辞めて行け」と、けんもほろろ。厳しい現実を突き付けられました。

ところが、捨てる神あれば拾う神あり。当時、海保にも国際化の波が押し寄せており、本庁に国際課が新設され、初代国際課長が私のことを耳にし、そんな「変わり者」がいるなら行かせてやればということで、国際課が人事課と調整、参加を認めてもらいました。

いずれにしても、外国船の海難に遭遇しなければ、上官からの命令がなければ、情けないとの意志が働かなければ、協力隊のポスターを見ていなければ、国際課ができていなければ、協力隊に参加することはなかったと思います。「偶然」と「意志」が化学反応し、もたらされた「必然」――第1話に通じるところがあります。

さて、これを契機に、英語との長い付き合いが始まりますが、残念ながら、期待するほどの能力は身に付きませんでした。なんと不甲斐ない。ただ、海外での生活を通じ外国人と接することに臆することがない自分に脱皮できました。この経験が平成29（2017）年9月の第1回「世界海上保安機関長官級会合」実施決断の背中を押してくれました。結果、職員の並々ならぬ努力もあり、国際連携・協力の新たな道を開くことにつながりました。

更に、英語を学ぶ道のりで素敵な言葉にも出合いました。2015年USCG Academyの学位授与式に出席したオバマ大統領（当時）のあいさつにある次のフレーズです。

It's been said of life on the sea — "the pessimist complains about the wind, the optimist expects it to change; the realist adjusts the sails."

和訳すると「海を生業とする者の間に次のような言い伝えがある。『悲観主義者は風に文句をいい、楽観主義者は風が変わることを期待する。しかしながら、現実主義者は風と向き合い帆を調整する』」といったところでしょうか。

海を生業とする海上保安官。「法」をメインマストに風を読み、帆を巧みに操り、日々変化する情勢に果敢に挑まれんことを期待します。

（第44代海上保安庁長官）

＝つづく